

# 母の 641 ひろば

doshinsha / haha no hiroba



ぼろり家族⑤／落合由利子 2  
 わたしが読んだ童心社の本⑦／児玉ひろ美 3  
 文化をつなぐということ  
 ——中国影絵「皮影戯」訪日公演レポート／江田拓雄 4-5  
 千竈八重子さん・右手賞受賞記念インタビュー 6  
 新刊紹介／嶋田泰子 7

イラスト／小泉るみ子

## 寄る年波に秋の風

富安陽子

目医者に行けば年寄がいる。歯医者に行けば年寄がいる。銀行に行っても、スーパーに行っても、道を歩いている、子どもを見ない日はあるが、年寄を見ない日はない。斯く言う私も追っ付け60歳。孫持ちの友人も増えつつあって、年寄の一員に数えられるべきなのかもしれない。62歳の夫は先日初めて電車の中で中学生に座席を譲られたそうで、ショックを隠しきれない様子だった。60前後というのは複雑なお年頃なのである。

子どもの頃は、自分がこんなに年を取るなんて想像もつかなかった。小学生の時、クラスの男の子から、ノストラダムスの大予言の話をかきされ「1999年に地球は滅びるんだぜ」と告げられた折にも、「なんだ、まだずっと先じゃん」と、私は意にも介さなかった。自分が40歳になる未来なんて、永遠にやって来ない気がしていたのだ。ところが、1999年も遠い昔。地球が滅びなかったお蔭で私は58歳になった。もともと物覚えは悪かったが近頃更に、よく物を忘れるようになった気がする。同い年の友人は「家にいると一日中、何か捜して歩き回ってなくちゃいけない」と言っていた。ちょっとした物を、どこに置いたのが忘れてしまうのだそうだ。そうやって歩き回っていると、これまた何かを捜して彷徨うご主人とすれちがったりして、「ふたりで、ずうっと、家の中をうろうろしてるのよ」と嘆いていた。なんとなく、わかる気がする。

子どもの頃58歳の自分なんて想像もつかなかったが実は今も、もっと年老いた自分の姿を想像できずにいる。怒ってばかりいる年寄、怒られてばかりいる年寄、のんきな年寄、短気な年寄——。いったい私はどんな年寄になるのかなと思ってみるがわからない。なってみてのお愉しみといったところだ。

今年私は、かけがえのない仕事仲間をふたり失った“菜の子先生シリーズ”の絵を描いて下さったY U J Iさんと、そして“ムジナ探偵局シリーズ”の絵を描いて下さった、おかべりかさん。どちらもまだ60代の早過ぎるお別れだった。生きて、年を重ねておられたら、おふたりはどんな年寄になって、どんな絵を描いておられたらう？ もう年老いることのないその面影を胸に、秋の日を過ごしている。

(とみやす ようこ／童話作家)

創業60年記念  
わたしが読んだ童心社の本7

## 命を抱く

## 嬉しさを

## 描いた絵本

児玉ひろ美

こだま ひろみ/JPRIC(一般財  
団)出版文化産業振興財団)読書ア  
ドバイザー、公立図書館非常勤司  
書、鎌倉女子短期大学・新渡戸学  
園短期大学非常勤講師。著書に「0  
〜5歳 子どもを育てる」読み聞か  
せ「実践ガイド」(小学館)。



長野ヒデ子・作

最近は何し出しも返却も自動化が多くなりましたが、司書にとって図書館のカウンターは、良くも悪くも、子どもたちの反応が直接感じられる場所です。子どもたちからは、さまざまなお話を直球で教えられました。そのなかのひとつに、〈子どもは自分が生まれてきたときの話を、聞くのも話すのも大好き〉ということがあります。

子どもたちは赤ちゃんが主人公の絵本を繰り返し借りては、「ねえ、赤ちゃんのとき、わたしかわいかった?」「なんでぼくの名前、〇〇〇にしたの?」と、家族に問い、カウンターに来ては、「児玉さん知ってる? わたしね……」と、ご家族から聞いたエピソードを、まるで見てきたように話してくれます。きつと無意識のうちに、自分がどんなに待ち望まれ、愛されてきたのかを確認し、そしてそのことを自分がどんなに嬉しく誇らしく思っているのかを、誰かに伝えたいのでしょう。それは国籍や文化に関係ない、子どもの本能なのかもしれません。子どもたちが赤ちゃんの絵本を借りる傾向は、国内外を問わず見られるようです。

一方、自分の生まれた時の話を嬉しそうに尋ねる子どもに答えるお母さんの表情は、本当に優しく、かつ自信に満ちて綺麗、というより、カッコいい! 普段のお母さんとは別の顔が垣間見え、親子ほどの年齢差でも、同じ女性として、同志のような気持ちになります。そう、出産はそれぞれにドラマやエピソードがあり、大変な思いをしたものの、それを乗り越え、みんなお母さんになったのです。初めての

子どもが生まれた時、それは、お母さんがお母さんになった時。お母さんの誕生日でもあるのですね。長野ヒデ子さんは出産をそんなふうにとらえ、『おあさんがおあさんになった日』を描かれたのでしよう。

予定日を過ぎて入院し、なかなか生まれない赤ちゃんを待ち望み過ぎすお母さんの一日を描くこの絵本は、最後に出産の無事をこんな言葉で喜びます。

わたしのあかちゃん、ありがとう。

あなたの うまれた日。

おあさんが おあさんになった日。

命を抱く嬉しさと喜びに満ちた暖かい絵と文に、涙ぐむ大人も少なくありません。ところが、子どもたちは、「赤ちゃん、偉かったねえ」と、少し上から目線(?)の一言。生まれた側の当事者感覚ってこんなふうなのかもしれませんね。

では、お父さんは、いったいいつお父さんになったのでしよう? そう思った方は、『おとうさんがおとうさんになった日』も、どうぞご家族でお読みください。きっと、お父さんが照れながら嬉しそうに顔をなさることでしょ。ある若いお父さんは「そうだったんですね。読むまで忘れていましたけど」と、鼻を赤くして仰っていました。

そうそう、今ではおはあちゃんとしての嬉しきも体験済みの長野さんは、『おはあちゃんがおはあちゃんになった日』も描いていらっしゃいます。

二〇一七年七月九日〜二十三日、中国から路連達先生と上海花影社が来日し、中国影絵「皮影戯」(以下ピーイン)の公演が行われました。童心社のKAMI-SHIBAI HALLをはじめ、東京・神奈川の各地で十一ステージ、六講座が開かれ、日本でピーインを体験する貴重な機会となりました。

幸運な出会い

上海花影社の母体となった上海虹文庫の顧問を務められ、今回の公演では劇団の「世話役」、日本の友人との「つなぎ役」として同行された、江田拓雄さんにお話を伺いました。

私が中国に移住したのは、一九九八年のこと。「日本の近代・現代を日本社会の外、東アジアからしっかりと見て生きた」という長年の思いを実行に移したのです。やがて生まれた幼子二人の寝言が中国語なのにハツとして、「豊かな母語環境」の必要を痛感しました。そして、同じ願いを持つ人々と集い、二〇〇三年、絵本や児童書、紙芝居などを使いながら、地域で子育てをするボランティア団体、上海虹文庫をスタートさせました。

日本語絵本の文庫運営はどうしても日本人中心でしたが、日中関係に不穏な空気が流れはじめていたある日、文庫で飛行機遊びをしていた子が、「ブーン、中国をやっつける!」と言っているのに衝

# 文化を

# つなぐと

# いうこと

## 中国影絵

## 「皮影戯」

## 訪日公演レポート

## 江田拓雄

えだ たくお／上海虹文庫顧問  
日中子どもお話の花畑発起人



路練達先生と子どもたち



舞台裏で影絵人形を動かす子どもたち



「亀と鶴」

撃を受けました。「子育ての天敵は戦争」です。「閉鎖社会での相手への嫌悪の増殖」が、戦争を準備させるのです。この頃から、日本人コミュニティの殻を破り、文庫を、地域に開かれ、中国の家族も共に子育てする場にしたと、真剣に、具体的に考えるようになりました。

そんなとき幸運にも路家影絵(旧王家影絵劇団)の六代目継承者で、この道一筋六十五年の達人である路先生と出会い、ピーインを演じてくださったり、手ほどきを受けたスタッフがお話会で演じたりするようになりました。

さらに、絵本や紙芝居、そしてピーイン大好きという中国人のお母さんたちと知り合う機会に恵まれ、文庫は中国人スタッフとの共同運営に成長していき、一方で上海在住の日本とお母さんたちによるボランティア劇団・上海花影社が結成されたのです。

ピーインとは

ピーインは、ユネスコの「人類の無形文化遺産」に登録されている中国の民間芸術です。愛妃に死なれた漢の武帝が、夜、とばりに映る「影」を見て彼女を偲んだという、二千年前の『史記』のエピソードがピーインの起源とされる伝説です。その後、宋の時代に確立して、中国

全土に広がり人々に親しまれてきました。しかし近代の急激な社会の変化とともに急速に衰退し、現在では保護政策がとられ始めています。

用いられる人形は、現在は主に黄牛の皮で作られます。光が透過するほど薄くなめした皮を彫刻し、美しく彩色して、関節が動かせるよう精緻につなぎあわせてます。演じる際には操り棒を持ち、スクリーンに人形を押し付けるようにして、後ろから光で照らします。また怒りや疲労で口で息をするのを表す時などは、しなやかな牛皮をくねらせて、胸や腹を波立たせたりもします。こうして映し出された色あざやかな光と影が、演じ手の技術により、繊細に、また大胆に動くのです。

路先生は、一九五七年には毛沢東主席の前で、「亀と鶴」「蛤と鷺の争い」（漁夫の利）を演じ、欧米などへの海外公演ツアーも行ってきました。

上海花影社も、路先生の指導のもと、中国でも貴重な存在となったピーインを子どもたちに楽しんでもらおうと勉強を続け、二〇一三年以来、八十余りの幼稚園、学校、公演会場等で、一万人以上の人々の前で演じてきました。

### 三十年ぶりの日本

一行は、今回の日本公演に、重い重い

影絵舞台の大袋と、六演目分の人形を詰め込んだ大きなスーツケース三つを抱えてやってきました。総勢二十名、中国も夏休みだったため、子どもたちも何人も同行しました。

羽田空港から鎌倉に向かう高速バスの中、車窓の景色を静かに眺めていた路先生が、ふと「三十年！」と漏らされました。路先生は一九八八年にも来日し、北海道から沖縄まで一年半かけて日本を縦断し、「孫悟空」の影絵を計五百回以上も演じたことがあったのです。「元日本兵だったという老人が『手伝わしてくれ』とボランティアに加わってくれたこともあった。もうおられないかなあ」と思い出話も披露されました。

当時五十前後の働き盛りだった先生も、もうすぐ八十歳。「あの世で先生や先輩たちに顔向けできるように、自分に残された時間は全て、ピーインの継承と普及のために使いたい」と決意を述べておられます。そこには、中国でも継承者の少なくなつたピーインの伝統を確実に伝えていきたいという思いと同時に、日本という一衣帯水の国へ文化を手渡し、双方の架け橋になりたいという願いも込められていました。「ピーインの種が、もし日本の土に根を下ろすことができたならば、きっと豊かな文化として育っていく。伝

統を継承し、改良を加えながら、ピーインが日本で進化していくかもしれない」と。

### 新しい種

先生の思いを果たすべく、一行は、観光もショッピングもなし、ピーインづけの過密なスケジュールをこなしました。童心社では、二十一日に公演が行われ、近くの保育園の園児や小学生、その保護者などが来てくれました。

花影社のママたちは、スクリーンの裏でピーイン人形を操りながら、日本の観衆の反応を敏感に感じとり、一喜一憂のライブ交流をしていました。「亀と鶴」のある場面では、スクリーンの片隅に淡いピンクの蓮の花がそっと開いていくのに気がついた園児たちが、可愛い拍手をしてくれました。舞台裏のママたちは大喜びで、園児たちの感受性と集中力に驚いていました。演じ終わり、舞台裏に来てもらってピーインのしくみを説明し体験してもらったときに、観客と一体になったと感じたママもいたようです。

路先生に師事し、日本で影絵師として活動されているSAKURAさんも、お手製のミニ舞台で影絵を披露してくれました（一人影絵のミニ舞台は、千年前の宋時代からの伝統でもあるようです）。ユーモラスなドクロヤ、つぼから蛇がニ

ユルニユル出てくるオリジナルな舞台に子どもたちは大喜び。上海のママたちにも大きな刺激になりました。SAKURAさんは公演の合い間に、路先生から人形の作り方から舞台の構造、演じ方までたくさんのお話を聞きました。

また、公演にいらした赤羽茂乃さんが、義理のお父様の赤羽未吉さんの著作「影絵芝居の話」（一九四〇）を手渡して下さいました。七十七年後の中国に持ち帰られたこの作品はまず、劇団員の間で大きく注目されています。

ピーインによる文化をつなぐ旅を通して、日本にも、訪問した路先生や劇団にも、新しい種がまかれました。「一回限りの打ち上げ花火にはしない。日本公演で学んだいくつもの課題にとりくんで、次の交流に備えよう」路先生と劇団ママは、もう歩き出しています。

今回の日本公演は和歌山静子さんと童心社のみなさんのお力添えで実現しました。長野ヒデ子さん、井上ユリさんは、私たちを家族のようにお宅に迎え入れてくださいました。深く御礼申し上げます。最後に、劇団のママたちより、「祝、中日文化交流長久久、友誼万古超存！」（日中の文化交流が絶えることなく、友情がとこしえにつつまますように！）

## BOOK

生きものは、  
みーんなつながっている

嶋田泰子



いきもの み一つけた (全4巻)

「いきもの かくれんぼ」

「かくれて ぱくり」

「いきもの ちえくらべ」

嶋田泰子／文

海野和男・中村庸夫 ほか／写真

本体価格 各1900円＋税

「いのちは めぐる」

嶋田泰子／文

佐藤真紀子／絵

本体価格 1600円＋税

散歩のとき、コンクリートのプランターに枯れ葉がついているのを見つけました。何の葉かなと見てみると、もそっと動きました。それは、枯れ葉ではなく、コノハチョウでした。見事な変身ぶり（擬態）に感動しました。その体験が「いきもの み一つけた」の4冊をうむきっかけになりました。

生きものたちの大事な目的は、敵（捕食者）の目を逃れて命をつなぎ、子孫を残すことです。そのためには、「生き残るための戦略」が必要です。

『いきもの かくれんぼ』『かくれて ぱくり』『いきもの ちえくらべ』では、こうした生きものたちの、生き残りをかけた見事な戦略を、たくさんの写真で取り上げました。

『いきもの かくれんぼ』では、武器を持たず、擬態して環境に隠れるだけしかない「かくれんぼの天才たち」が主役です。葉っぱや木の枝、石ころや海藻になりきっている生きものたちを、敵（捕食者）になったつもりで探していただけたらと思います。

『かくれて ぱくり』は、花や岩、植物などにそっくりになって、姿を隠し、獲物を待ち伏せする生きものたちが主役です。安心させて、ちかづいてきた獲物を襲う場面が目目を奪います。また、体の色をみるみる変えてしまう生きものも登場します。

『いきもの ちえくらべ』は、毒をもつもの、危険なものそっくりになって敵をあざむいたり、危険なものと暮らせるような特性を身につけた生きものが主役です。あまりいい言葉ではないかもしれませんが、「他人のふんどしで、すもうをとる」とか「虎の威を借る狐」というような隠れ方を見せてくれる生きものたちです。なぜ、どうして、こんなことができるようになったか、そのふしぎがいつばいつめこまれています。

『いのちは めぐる』は、絵本です。他の3冊では、生きものが自分の命を守るためのさまざまな戦略を紹介しましたが、この本では、食物連鎖、つまり、生きものたちのつながりを取り上げました。食物連鎖はピラミッド型で表現されることが多く、最終捕食者（一番強い生きもの）が頂点に描かれます。でも、頂点は終点ではありません。どんなに強い生きものも死に、だれかに食べられます。ここでは、食べて、食べられて、命がめぐっていること、どんな生きものも、大きな命の輪の中にいることを伝えたいと思いました。

みんな、何かを食べて生きている。その何かというのは、ほかのものの命。人間も含め、生きものはみんな、誰かの命をいただいて、自分の命をつないでいる——。そんな気持ちを、この全4冊にこめました。 (しまだ やすこ／本の企画・編集・執筆)



昔の紙芝居道場の前で、紙芝居を演じる千竈さん

# 千竈八重子さん 右手賞受賞記念 インタビュー

紙芝居の振興・普及に貢献した<sup>うてごじょう</sup>・和子親子を記念して、紙芝居の実演や普及に優れた業績を残した個人・団体に送られる「右手賞」。2017年度の個人賞を受賞された<sup>ちかまやえこ</sup>千竈八重子さんにお話を伺いました。

## 千竈さんと 紙芝居の出会いを お聞かせください

市立図書館で働いていたころ、お話会で、絵本の読み語りだけでなく、紙芝居もやるようになったのが始まりです。書棚の間の、手や肩が触れ合うほど狭い空間に集まった小さな子どもたちが、物語の世界を共有して一緒に盛り上がりつつある姿を見て、紙芝居のもつエネルギーを知ったんです。絵本と比べると図書館の紙芝居は点数も予算もずっと少なく、私自身も最初は絵本のことばかり考えていたんですが、紙芝居の力を目の当たりにして、次第に考えが変わっていきましました。

のちに、ベトナムに紙芝居を普及する活動のお手伝いする機会がありました。ベトナムの幼児たちの反応を見て、改めて国や文化を超える紙芝居ってすごいと思いました。

## 主宰されている 「紙芝居道場」は どんなところですか？

一九九四年に図書館を退職したあと、湯布院の塚原高原に移り住んで、敷地内に「鬼ヶ島文庫」という子ども文庫を開きました。近所の親子連れからはじまって、いまでは福岡や別府などからも来てくれるようになりました。なかでも紙芝居の利用率は抜群で、そのうち文庫の隣に「紙芝居道場」を開いたんです。

舞台を置いて、ボランティアやサークルの人々が、実際に演じながら学びあう場にしています。もちろん、日常的に子どもたちも紙芝居を聞きにやってくるんですが、みんな自分でも演じたいがります。発達障害のあるお子さんもやって

## 数年前に 道場に変な災難が あったと伺いました

来るのですが、丁寧に繰り返し演じているうちに、だんだん自信をつけていったようです。  
二〇一三年の三月、県外へ出かけている時に知らせを受けて急いで帰ると、自宅と一緒に、文庫も道場も焼けて無くなっていました。貴重な資料や、子どもたちに愛された本や紙芝居も燃えてしまったのですが、火災後、多くの方から紙芝居や絵本を寄せていただきました。白紙から資料台帳を作り直して、五月で文庫を再建し、そのあと紙芝居道場も再開することができました。

翌年には、紙芝居脚本家・堀尾青史の生誕百年記念展が明治大学で開催されたと耳にして、その資料の貸し出しを願い出しました。多くの方々の力を借りて、文庫と道場の再建を記念した展示と講演を開くことができました。

## 今後 取り組みたいこと 伝えたいことは？

秀でた紙芝居作品は、すでにたくさんあります。私は、その素晴らしい世界へ一人でも多くの人を招き入れて、演じ手の資質を高めるお手伝いをしたいと思っています。演じるコツは、とにかくたくさん読み、他の人が演じるのもたくさん聞いてみることに。そして自らがつくることが大切ですよ。

お気に入りの紙芝居がきたら、図書館で借りずにぜひ購入して手元に置いて、自分のものにしてくださいね。

# 10月の新刊図書!

ももんちゃん あそぼう

## おんなじおんなじ ももんちゃん

とよたかずひこ/さく・え

本体価格 800円+税



よいしょよいしょと、みんなでつくったゆきだるま。ももんちゃんとおんなじ赤いぼうし、赤いてぶくろ、赤いながぐつをつけたら……。

どーんと やさい

## にんにん にんじん

いわさゆうこ/さく

本体価格 1100円+税



土の中、ほそーいねっこがだんだん太くなって、にんにんに! むらさき色のにんじん、長いにんじん……、いろんなにんじんがあるよ。

怪談オウマガドキ学園

## ②4 火の玉ただよう消火訓練

常光徹/責任編集

村田桃香・かとうくみこ・山崎克己/絵

怪談オウマガドキ学園編集委員会/編

本体価格 680円+税



今日は消火訓練の日です。「ロウソク」など「火」をテーマにこわ〜い話を13話収録。「休み時間」のコラムでは、火の俗信を紹介!

怪談オウマガドキ学園

## ②5 図書室は異次元空間

常光徹/責任編集

村田桃香・かとうくみこ・山崎克己/絵

怪談オウマガドキ学園編集委員会/編

本体価格 680円+税



オウマガドキ学園の図書室にはふしぎな本がいっぱい。妖怪が人間を研究した本もあるよ。「本」や「文字」の怪談を13話収録。

「母のひろば」への「意見・ご感想」のほか、子育てについて日々思うこと、子どもたちとの活動などについて、お便りをお寄せください。送り先は下記、童心の会宛にお願いします。  
\*お便りを誌面で紹介させていただくことがあります。その際には編集部で選んだ絵本を二冊差し上げます。



イラスト/小泉るみ子



2017年10月15日発行 (毎月刊)

母のひろば 第641号  
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会  
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6  
株式会社童心社内  
電話03(5976)4402  
編集発行人: 大熊裕  
童心社のホームページ:  
<https://www.doshinsha.co.jp/>  
フォーマットデザイン: bise inc.

### 定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



### あとがき

- 「いきもの みーつけた」というシリーズをつくったため生物関係のニュースに敏感になりました。最近の調査で、北極海に棲むグリーンランドザメがひどく長命だとわかり、392歳という個体が見つかって脊椎動物の長寿新記録だそうです。年1センチしか成長せず、150歳でやっとおとなになるとのこと。羨ましいような、そうでもないような…… ㊦
- 中国に赴任していた知人が帰国して感じたのは、公共の場で子連れに向けられる視線の冷たさでした。大気中の汚染物質は少ないけれど、子どもを囲む空気は刺々しい。最近はずいぶん電車でも、海外からの観光客らしき親子の姿をよく見かけます。「郷に入りては」なんていわず、閉塞しがちな空間に吹き込んでくれた新鮮な風を、胸を開いて迎えたいものです。 ㊦